「手習い」イギリス文化論　第5回

イギリスな休日

(独)日本学術振興会　特別研究員(酪農学園大学酪農学部所属)
小林　国之

一九九二年式銀色のローバーSi220が値上がりを続けるディーゼルのやや黒い排気ガスを出しながら、林の中の坂道を上っている。林の奥にかすかに見える川面はエクセターへと下るエクセ川のまだ小さな本流である。さっきまがったラウンドアバウトが、曲がるべきやつの一つ手前だったな、と思いながら、助手席においた地図にちらっと目をやった。大学の研究室を出発する前に、インターネットで探した、今向かっている農場の地図と、デボン州政府のホームページから探した、宿の近くにあるフットパスの地図が、置かれている。

エクセターを出たのが午後三時。朝方に降った激しいシャワーが嘘のような青空が広がっている。M五の二七ジャンクションを降りてからエクスムアの南端に入るまで約二十分のドライブである。市内からずっとかかっていたローカル放送の「ジェミナイFM」もそろそろ電波の範囲外に近づいてきたらしい。ランダムに選んだCDは、日本からもってきたクレイジーケンバンドだ。林を抜けて目の前に広がりだした、見渡す限り連なる丘。緑色の上に散らばっている白・茶色の点は、草をはむ牛、羊の群れ。絵はがきのような風景に、微妙に横山険の声がマッチする。

◆

◆

◆

小林　国之（こばやし　くにゆき）氏

1975年　　北海道に生まれる
2003年3月　北海道大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了（博士（農学））
　　その後、北海道大学大学院農学研究科研究員を経て
2004年4月　日本学術振興会特別研究員（酪農学園大学酪農学部所属）
2005年4月～2006年10月　Exeter University、Centre for Rural Research に客員研究員として在籍

◆主な著書
「『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防」㈱日本評論社　2005年

約一ヶ月前の七月中旬、ふと農家のやっているB＆Bに泊まろうと思い立ち、以前にどこかの観光案内所で入手した「De-von Farm Accommodation 2006」というB＆Bを紹介している小冊子パラパラとめくりながら、どこにしようかと、あてもなく思案した。手がかりは数行の紹介文と、ランキングの星の数、それと切手二枚分ぐらいの大きさの写真だ。あるところは星五つにさらに「Golden award」と書いてある。一体それがなんなのかわからないが。たいていの殺し文句はこれだ。「都会

エクスムア

の喧噪を離れて、すばらしい農村風景の中、十五世紀に立てられたファームハウスを改装したB＆Bでローカルフードを食べながら、自分を甘やかしてみませんか？」

ほとんどのところがホームページももっている。いくつか目星をつけてホームページを見てみる。すばらしい景色と、ファームハウス、プールも整備されています。という宿泊施設としての良さをアピールしているところもあれば、「私たちは働いている農家です。牛と羊を飼いながら、B＆Bもやっています。」という家庭的な雰囲気を前面に押し出しているところ。

色々と探してみたが、ホームページにのっていた宿主のおじさんとおばさんの優しそうな写真と、勘を頼りに一つを選んだ。七月から八月にかけてはホリデーシーズンで、B＆Bなどはどこもいっぱいだ。メールで空き室状況を問い合わせると、「来月中頃までずっと満室です」、という回答。特に急いでいるわけでもないので、「では待ちます」、と返信をした。

あれやこれやで一ヶ月が過ぎ、出かける当日、朝の研究室でパソコンにスイッチを入れながらふと思った。向こうに着いてから何をしようかと。返信のメールには「今は農作業が忙しいのでこちらに来るのは午後五時以降にお願いします。」とあった。夕食は六時半から、ということだったので、六時頃チェックインするとして、午後は何をして過ごそうか。宿まではたぶん一時間ほどなので、大学を五時ぐらいに出発すればいいかとも思ったが、ただ「行って泊まって帰ります」、では味気ない。ここは一つ、イギリス人的な休日を演出してみよう、と思い、それにはウォーキングだ、ということで、宿の近くのフットパスをインターネットで探した。近くの村に手頃な距離のフットパスが見つかり、その地図をプリントアウトして車に乗り込んだ。

◆　◆　◆

連なる稜線沿いに走る道路を運転しながら、左右の景色に目をやる。エクスムアの南端に入ってからB＆Bまでは小一時間ほどのドライブになりそうだ。車二台がちょうど通り過ぎることが出来るような道幅の道路の、両端ぎりぎりまでヘッジが迫っていて視界は悪い。緑の壁で覆われた迷路の中を走っているようだ。カーブでは完全に前方の視界が遮られる。教習所でしてはいけないと指摘された「たぶん対向車は来ないだろう」という「だろう運転」しか、ルームミラーに映る時速五〇マイルで迫ってくる後続車の無言のプレッシャーをかわす手立てはない。そんな道路を走っていると、時折ぱっと視界が開ける。ヘッジで切り取られた幾何学模様の緑の丘。遠方には、エクスムアのヒースも見える。景色の美しさに目を奪われている暇もなく、視界はまた緑色の壁に遮られてしまう。ハイスピードで

過ぎていくチラリズムの農村風景に、ゆっくり見てみたい、という思いは募っていく。

そんな欲望を叶えてくれるのが、フットパスだ。ヘッジで囲まれた畑。道路を車で走っている限りでは、緑の壁に覆われて中を窺い知ることが出来ないその秘密の空間に、フットパスは導いてくれる。それは、開かれているようで実はなかなか立ち入ることの出来ない、通り過ぎるしかできない農村風景の中に、異質な人間を招き入れてくれるゲートのようなものだ。

◆　◆　◆

その秘められた解放空間への入り口は、実はいたるところにある。簡単に目につくものから、茂みに覆われてひっそりとたたずんでいるもの。今回私が目指したフットパスは、B&B近くにある小さな村にあるらしい。地図を頼りに村の中を進んでいくと、入り口は十～十二世紀頃に建てられたらしい教会のすぐ近くにあった。教会前の駐車場に車を止め、日本からもってきたかれこれ十年ほど愛用しているぼろぼろのリュックを背負い、ジーンズ姿のアジア人がフラフラとフットパスのゲートをくぐった。途中、普通は柵を乗り越えるためにあるスタイルと呼ばれる踏み台が、柵もない道にそっと置かれていた。そいつをわざわざ乗り越えて行くと、すぐに羊が放牧されている畑に出た。ここはたぶん牧草地ではないだろう。麦刈り後の畑のようである。電流が流された牧柵の向こうで、突然の来訪者に驚き、フンをひりながら逃げ出す羊の親子。そろそろ、出荷の時期が始まったらしいラム肉達が、まだあどけない顔でこっちの様子をうかがっている。地図を頼りにしばらく進むと、フットパスがロープでふさがれている。地図ではこの先の圃場を横切って、川の流れる方に丘を下っていくようになっているのだ

スタイル

が、どうやら一時的に封鎖されているらしい。しばらく戸惑っていると、青空から急にシャワーが落ちてきた。西の方にある灰色の雲から風に乗って流れてきている。木陰で雨宿りしながら、しばし歩いてきたみちを振り返ってみた。車をとめている教会に、イングランドの旗がたなびいているのが見える。その隣はロンドンインという名前のパブだ。

時計は五時をすぎている。ロープを超えて歩いていくのも、手だとは思ったが、どうなるかわからない。雨もまだぱらついていることもあり、車へ戻ることにした。戻る途中、馬に乗った家族連れが、犬を二匹従えながら道路を横切っていった。

◆　◆　◆

目指す宿を見つけたのは五時半を少し回った頃である。ヘッジの切れ間に出現した看板とゲートを見つけて、車の速度を落として、そろりそろりと農家の住宅へと続く私道を走らせる。その砂利道はゲストパーキングと看板の掛けられた倉庫にぶつかった。その手前にはジョンディアのトラクター。後から気がついたのだが、ゲート近くに立っていた納屋には二頭のロバが飼われている。車を誰もいない駐車場に止め、鉄のゲートをくぐり玄関へと向かう。前庭は綺麗に手入れされていて、二人がけのベンチが南向きに二つ据えられている。ベンチから見える景色は、見渡す限りの緑の丘である。建物は白い壁の二階建てで、L字型になっている。思ったよりこぢんまりとした造りだ。玄関はL字型の折れ曲がった角のところにある。ドアの横にある窓ガラスには、ランク付けを示す五つ星のシールと、ローカルフードを使っています、というシールが貼られていた。ベルはどこだろうと思った瞬間、ドアを開ける音がした。やや驚いて顔を上げると、初老の女性が笑顔でたっている。自分の名前

フット パス

を名乗ろうとしたがそれよりもはやく彼女が「いらっしゃい。どうぞ入って下さい。」簡単な挨拶をすませて、二階の部屋へと案内してくれた。「客室はいくつあるんですか。」と聞くと、「三つだけですよ。」とニコニコしたまま答えてくれた。ホームページの写真にあったとおりの優しそうな笑顔である。創業以来三十年ほどになるこのB＆Bを一人で切り盛りしていると言うことだ。春先の子羊が生まれる忙しい時期にはご主人の手伝いもするのだという。今日のお客は私の外に二組で、まだついていない様子だ。話では、年間平均すると、一日平均で四名のお客さんが来る計算になるらしい。たいした回転率である。

◆

◆

◆

建物内の写真はご遠慮下さいということだったが、アンティークの家具や食器類、それに彼女の趣味なのだろう、女の子の絵などがこざっぱりと飾られている。天井が低く、白い壁に走っている湾曲した黒い梁がおもしろい。廊下が斜めになっているところも味がある。案内された寝室は斜めの廊下の突き当たりにあった。室内にはシングルベットが二つ、南向きの窓の両側にいすが二つ置かれている。窓からは丘の風景を見渡すことが出来た。室内はなにやら懐かしい臭いがする。小さい頃祖父母の家に夏休みに泊まりにいったときのことを何となく思

B&B

い出させるような臭いだ。バスルームは北側にあり、そこにも大きな窓があってとても明るい。浴槽付きのシャワーや洗面台などどれも綺麗に手入れされているようだ。

室内の簡単な説明の後、一階のラウンジへの案内してくれた。ラウンジは日本風に言えば十二、三畳ぐらいの広さで、アンティークの机といすが窓際に置かれている。中央には大きなソファーが暖炉の方を向いて配置されている。食後にここで紅茶を飲みながらくつろぐのだろう。暖炉の両側と上には、農耕馬に鋤などをつけるための馬具が、何かの美術品のように綺麗に飾られていた。

夕食まではあと三十分だ。とりあえず部屋に戻り、静寂を破るためにテレビのスイッチを入れて、ベッドの上に置かれている宿紹介のファイルに目を通した。施設の説明や注意事項と並んで農場や地域の歴史がかかれている。この農場が最初に作られたのは十一世紀のことらしい。現在は肉牛、羊を飼っている。また、ここでは地下水をくみ上げて利用している。水道水よりも美味しい水ということだ。早速バスルームに行ってガラスのコップで蛇口から水を汲み、コップを窓の方に向けて眺めてから、ぐいっと飲んだ。確かに水道水特有のいやな味がない。私の家の水道水は、飲めないほどではないが臭いが気になるのでいつもミネラルウォーターを買って飲んでいる。それでも、デボン州を含めたサウスウエストという地域は、水は良質なことで有名だというのだが。きっとこうした良質の水が水道の蛇口から出てくる、ということも、都会から旅してきた人にとっては大きな喜びの一つなのだろう。

◆　◆　◆

そうこうしている間に夕食の時間となり、ダイニングへと降りていった。テーブルには私の外に二つのプレートが置かれているが、まだ誰もいない。ダイニングの奥にあるドアの向こうが、キッチン兼彼女たちの居住空間となっているようだ。ドアの横にある鐘を鳴らして、自分が来たことを告げた。ドアから顔を出した彼女は、「もう一組がまだ来ていないのよ。まあいいわ、どうぞ座って下さい。」

前菜のサラダの次に出てきたのがポークをソテーしてから野菜と煮た料理に、茹でた新じゃが、アスパラ、ニンジン、インゲンである。農家の入り口のところにDevon Red Rubyというこの地方の特産牛の看板がでていたので、すっかりビーフが食べられると踏んでいた私は、ちょっぴりがっかりしたが、とても軟らかく煮てあるポークをあっという間に平らげた。食後には手作りのチーズケーキのアイスクリームが出てきた。紅茶を飲んでしばらくまったり。その間も来るはずのお客さんはまだ

現れなかった。

◆　◆　◆

食後にラウンジで、テーブルの上においてあった豚や牛の写真集などを見ながら、やおら寝室に戻った。時間はまだ八時前である。外も十分に明るい。今日は珍しくお酒も飲んでいない。一思案して、風呂にはいることにした。わたしのアパートにはシャワーしかなく数ヶ月間湯船につかっていないのだ。バスタブに取り付けられた蛇口をひねり、しっかりと熱いお湯であることを確かめてから、ベッドに横になって十五分ほど待った。

バスルームに行き湯船をみると、張ったお湯がなにやらうっすら黄緑色をしている。入浴剤を入れたかのようだ。きっと土質の関係で地下水に色が付いているのだろう。ふと、以前本で読んだスコットランドのウイスキーに使う地下水のことを思い出した。世界的に有名な日本人のウイスキーライターが、スコットランドに旅したときに泊まったB&Bで、二日酔いの朝にピートで茶色く色付いた水をのみ、そのうまさに驚く、というものだ。

それにしても、洗い場のないこの浴槽というものがどうも好きになれない。好き嫌いと言うよりも、よく使い方がわからない、というのが正直なところだ。若い頃はテレビで見たシャボンがブクブクと泡だったお風呂にあこがれた。小さい頃、自分の家の浴槽に石けんを入れて、一生懸命泡立てようとしたこともあった。お湯がただ白く濁るだけで、一体どうすればあんなに泡立つのだろう、と私の憧れはますます募ったものだ。そんな多感な時期を通り越した私にとって、湯船につかりながら、体をごしごしこすって洗う、というやり方がどうも気持ちよくない。綺麗になった気がしないのだ。それに、こちらの人は洗った泡まみれのままタオルで体を拭いて、それで終わり、という人も多いのだそうだ。食器を濯がない人達だからなのだろうか。

それでも、久々に湯船につかった私は、シャボンともしばし戯れた後に、思い切って浴槽の水を流すことにした。湯船をからにしてからシャワーを浴びようという作戦だ。徐々に減ってゆくお湯に最後まで何とか浸かろうと浴槽に這いつくばってから、立ち上がりシャワーのノブを回した。これで泡をさっぱり流して私の数ヶ月ぶりの入浴はさわやかに終了する予定だった。しかし、ノブをいくら回しても、蜂の巣のような形をしたシャワーヘッドからはちょろちょろと流れるのみである。いくらノブを全開にしても、いっこうに変わる気配はない。「使い方は簡単ですよ。」と教えてくれたおばさんの顔が浮かぶ。（使い方は確かに簡単だけど、勢いが。）しみでるように落ちてくる

納屋

シャワーを何とか浴び、ぬめり気がとれた頃に、一つくしゃみをした。窓の向こうには、茶色い牛が草をはんでいた。

◆　◆　◆

髪が乾くのを待ってから、寝ることにした。時刻は十一時過ぎ。何一つ音のしない静寂の中で、知らない間に眠っていた。

◆　◆　◆

朝食は八時半といわれていた。ほかのホテルなどに比べるとゆっくりとした時間設定である。朝食のダイニングには、昨日は見かけなかった二組のお客もすでに席に着いていた。両方とも中年の夫婦である。一方は恰幅のいい豪快な笑い声のご主人と、陽気な笑顔が印象的な奥さん。もう一方は、細身でまじめそうな顔をしたご主人と、ブラウンのショートヘアーをした健康的な奥さんの組み合わせである。朝食のイングリッシュブレイクファーストを食べながら話をしていると、二組の共通点と相違点からイギリス人のカントリーライフの楽しみ方が見えてきた。共通点。二組とも子供ももう独立して二人の時間があり、カントリーサイドに家を構えている。窓から見える彼らの車もドイツ製の日本で言う高級車だ。数日の休日を利用して、この地域にホリデーに来ているのだ。相違点。恰幅のいい方のペアは、ドライブであちこちを回りながら、風景を楽しみ、パブを楽しむタイプである。細身の方のペアは、本格的なウォーキングを楽しんでいる。今日もこれからダートムーアにむかって、二十キロほどのウォーキングをするのだという。それを聞いてきた恰幅のいいご主人は、「私は車を発明した人に感謝したいね。」といっていた。どちらもカントリーライフだ。

B&B 遠景

九時半頃、チェックアウトをするためにダイニングに降りていくと、昨日は見かけなかったご主人がいすに座っていた。今の時期はそろそろ子羊の出荷が始まる時期なのだという。これから仕事に出かけるところだそうだ。私もそろそろ出発の時間である。二人にお礼を言ってから玄関を出て、車に向かった。駐車場横にある納屋から豚が顔を出している。夫婦の恰幅のいいご主人が、その豚の写真を撮っていた。今まで見たことがないような珍しい姿をしている。その夫婦は自分の家でもペットとしてかなりの頭数の豚を飼っているということだ。奥さん曰く、「豚ほど魅力的な顔をした動物はいないわよね」。なにやらイギリス「カントリーライフ」の奥深さを垣間見た気がした。

◆　◆　◆

一時間ほど車を走らせてM5に戻った。時速七〇マイルで走れば、一時間かからずに大学に戻れるだろう。ラジオのスイッチを入れた。おなじみの「ジェミナイFM」の電波の範囲内に戻ってきたようだ。ディーゼルのうるさいエンジン音の上に、最新のヒット曲が流れた。